

News Letter

Graduate School of Education

巻頭言 子安 増生 研究科長 ②

研究ノート ③

教員から 山田 剛史 高等教育開発論講座 准教授
院生から 河村 悠太 教育認知心理学講座 修士課程 2年
社会人院生から 坂下 直子 教育方法学講座 修士課程 1年(専修コース)
留学生から ジョン・ハンモ 生涯教育学講座 修士課程 1年

活動報告 ⑤

臨床教育実践研究センターから
時岡 良太 附属臨床教育実践研究センター 特定助教
教育実践コラボレーション・センターから
山名 淳 教育学講座 准教授

E.FORUMの取り組み ⑥

西岡加名恵 教育方法学講座 准教授

学術交流協定の更新

南部 広孝 比較教育政策学講座 准教授

大学院・学部第3年次編入学 入試説明会 ⑦

オープンキャンパス2015 ⑦

平成27年度教育学研究科長賞・教育学部長賞 ⑧

鈴木 晶子 学生表彰選考委員会委員長・副研究科長
梶村 昇吾 教育認知心理学講座 博士後期課程2年

事務室から 野村 昌平 教務掛 ⑨

図書室から 飯田 智子 図書掛長 ⑨

諸記録 ⑩

①おもな出来事 ②人事異動 ③外部資金受入

諸報 ⑫

新任教員・事務職員紹介

教育学研究科・教育学部基金創設 ⑫



京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製薬、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

大学入試考



研究科長 子安 増生

京都大学は、平成28年度の入学選抜から「高等学校における幅広い学習に裏付けられた総合力と学ぶ力および高い志を評価し、個々の学部が定めたカリキュラムと教育コースを受けるにふさわしい学力と意欲を備えた者を選抜」する京都大学特色入試を導入しました。その選抜方法は、学部学科ごとに異なりますが、①書類審査、②能力測定考査、小論文、面接等、各学部学科で設定した試験、③大学入試センター試験の総合成績で合否判定を行うものです。教育学部も入学定員60名のうちの6名を特色入試で選抜します。

この入学選抜方式は、吹きすさぶグローバル化という大学改革の嵐の中で、むしろローカル色が強いと言えるかもしれません。なぜなら、大学教員が「入学試験」を実施するというわが国の方式は、そもそも世界の常識から外れているからです。

たとえば、フランスでは、中等教育修了証明であると同時に大学入学資格証明でもあるバカロレア(baccalauréat)の存在がよく知られています。フランスの大学は国立ですが、高校卒業時にバカロレアを取得すると、原則としてフランス国内のどの大学でも入学できる建前です。実際には、人気の高い医学系など、希望者が大学の定員を超える場合には、バカロレアの成績がものをいいます。いずれにしても、首都の名門パリ大学に入学希望者が殺到し、パリ大学は第1大学(ソルボンヌ)から第13大学まで拡張され、学生数は30万人を超え、マスプロ教育の弊害が夙に指摘されています。結局、フランスでは大学はエリート養成機関でなくなり、大統領や多くの閣僚を輩出するENA(国立行政学院)など、グランドゼコール(grandes écoles)と呼ばれる別格の高等教育機関が政官民学のエリートを養成しているのです。

ドイツのアビトゥーア(Abitur)もバカロレアと似た制度ですが、大学と職業系学校との複線型学校制度が色濃く残るドイツは、ヨーロッパの中では大学進学率が低く、また地方分権的色彩が強い国なので、パリに学生が一極集中するフランスのような問題は生じていません。ちなみに、ドイツの大学も国立であり、授業料等がほぼ無料ということもあり、学生の平均在籍年数が大変長いことで知られています。

英国の大学もバッキンガム大学など3校を除いてすべて国立であり、入学選抜に際して、高校の最終学年に受ける

GCE(General Certificate of Education)のAレベルの3科目の試験の成績が、どこの大学・学部に進学できるかについての決定要因になります。欧米では、心理学は理学部または広く理系に属する大学が多いのですが、私が以前ケンブリッジ大学の心理学の大学院生に高校で受けたAレベル試験3科目の内容を尋ねたところ、「数学、物理、化学」という返事をもらいました。

アメリカ合衆国では、州立大学と私立大学がありますが、無試験(オープン・アドミッション)の大学がある一方、難関大学の入学選抜に必要な条件として、高校在学中にSAT(Scholastic Assessment Test)を受けることが求められます。アメリカは高校教育の教科内容が州や地域ごとに多様であり、試験科目の統一が困難なので、言語領域と数学領域からなる一種の知能検査のようなSATが実施されているのです。日本の国立大学共通一次学力試験(センター試験の前身)はSATを参考にしたと言われますが、SATは教科の習熟度を調べる試験ではないので、内容は全く別物です。

日本のいわゆるAO入試は、アメリカのアドミッションズ・オフィス(admissions office)を模したものとされますが、これも似て非なるものです。アドミッションズ・オフィスは、学生の募集から入学選抜までの一連の業務をその専門職員が行うものです。すなわち、この場合も大学教員は原則として入学選抜には直接タッチしません。「教員がAO入試も行う」日本の入試とは根本的に異なっているのです。

以上のように、大学教員が入学試験を実施するというわが国の方式が「世界の常識から外れている」ということは、誇張でも何でもありません。外国の制度を学び、良い点を取り入れること自体は間違っていないが、一国の教育制度はその国の歴史に根差したものです。フランスの大学は、希望どおりに入れても、学年進級と卒業時における落第率は相当高いのです(大学中退率は約27%)。他方、入学選抜に高校の3科目しか課さない英国は、狭く深く学ぶことを推奨しており、大学では教養教育は無きに等しく、主に専門教育だけを行う3年制(医学部は5年制)となっています。

入試改革と称して、あちらこちらの国からいろんな制度を断片的に取ってキメラのように貼り合わせた入学選抜制度にならないことを切に願うものです。

教員から

高等教育開発論講座
准教授

山田 剛史



大学教育と学生の学び×成長

2015年4月より、高等教育研究開発推進センターに着任いたしました山田剛史と申します。大学院修了後、同センターで大学教育に関わる仕事をしていた縁もあって、その後、島根大学、愛媛大学と2つの大学で授業やカリキュラムの開発、組織開発、教職員能力開発、大学間連携など大学教育改革・改善の推進に従事し、10年目の今年、京大に戻ってまいりました。この間、大学を取り巻く状況は大きく変わり、大学も様々な要求に応答するべく改革を進めています。このスピード感を少し楽しみつつ、渦中であって潰れそうになりながら、なんとか走ってきました。

大学院では心理学を専攻し、博士論文では青年期における自己形成の構造とプロセスについて理論的・実証的研究を行いました。「大学生の成長・発達と一口に言っても、何がどのようにどうやって遂げられるのか、それを研究を通じてどうやって捉えることが出来るのか」というのが素朴な疑問でした。大学院以降研究

してきた大学生の成長に関する心理学的アプローチと、職務を通じて実践的に関与・研究してきた大学での教授・学習に関する大学教育学的アプローチとを有機的に結びつけ、大学教育の実践的問題解決を実践面・研究面で支援することが自らのミッションだと考えています。具体的には、教育・学習環境が学生に与えるインパクトの検証、学習成果測定を含めた高等教育アセスメントの開発・評価、それらの結果を踏まえた教育・学習環境の開発、組織レベルで導入・実装するための教育の質保証の仕組みやその構築プロセスに関する実践的検討などを行っています。

最終的に、学生が卒業し、社会に出て、「大学に行くととても成長した」「あの時学んだことや経験したことがあって今の自分がいる」としてもらえるような、21世紀を生きる若者の「幸福」の基盤となる大学の教育・学習環境を創造すること、あるいはその支援を行うことが出来れば幸いです。

院生から

教育認知心理学講座
修士課程 2年

河村 悠太



利他性の心理学

私は人間の利他性を中心に研究を進めています。お年寄りの重そうな荷物を代わりに持つ。友達に食べ物や飲み物をあげる。他者のための行動は日常的に見られる行為で、人間の社会における中心的な営みであるといえます。しかし、よく考えるとこうした利他的な行動が進化してきた理由は幾分不可解です。というのも、自らの利益を犠牲にして他者の利益を優先する個体が、常に自己利益を追求する個体に対して生存競争において優位に立つとは一見考えにくいからです。にもかかわらず、なぜ利他行動は淘汰されずに残っているのでしょうか。

近年では、利他行動の進化を支えてきた要因の一つとして、評判を介した間接的な互惠関係の存在が指摘されています。例えば道端で他人の財布を拾って交番に匿名で届けたとしましょう。これは財布を自分のものにした方が得をするようにも思える状況です。しかし、その利他的な行為を目撃した第三者によって社会的な評判が高まり、のちに他の人から利他的に振舞って

もらえるかもしれません。「情けは人のためならず」のこのわざ通り、利他行動は一見自己利益を犠牲にしているだけのように見えて、実は第三者からの将来の利他行動によって報いられるために長期的には得をするのだとするのが、間接的互惠関係に基づく利他行動の進化の説明です。

私の修士の研究では、こうした進化的な背景に基づいて評判と利他行動の関連について心理学的検討を行いました。今後は、神経科学的な手法を含め幅広い知見を取り入れて研究していきたいと思っています。

また、私は博士課程教育リーディングプログラムの一つであるデザイン学連携プログラムにも参加しています。本プログラムでは情報学・建築学・機械工学・経営学を専攻する院生とともに、社会の様々な問題解決のためのデザイン方法論を学んでいます。将来は現在進めている研究の知見を、利他的な行動を促進する社会環境のデザインに繋げていきたいと考えています。

社会人院生 から

教育方法学講座
修士課程 1年(専修コース)

坂下 直子



理論と実践の往還による学校図書館の考究

みなさま、母校の小学校の図書室を思い出せますか？たぶん、覚えておられない方が圧倒的ではないでしょうか。

私は現在、学校司書として小学校に勤務し、系列大学の司書課程で、司書・司書教諭養成科目を講義しております。

デューイの『学校と社会』にある図書館を中心に据えた図は有名ですが、日本では明治・大正・昭和の戦前戦中戦後を経る中で、その時々^{そのとき}の系統主義・経験主義教育の色濃い影響のもと学校図書館の運命は翻弄されてきました。学校図書館法にあるとおり、教育の展開に寄与するという大きな使命を果たしているだろうかと自問自答する日々です。

実践に身を置き学校図書館の意義と課題を日々感じている者として、その実感を学術的に探究してみたいと思うに至りました。西岡先生のご厚意で「教育方法学からのアプローチ」というご示唆を得て、講座の末席に

加えていただいております。

ゼミでは田中先生・西岡先生・石井先生の珠玉のお言葉と温かいお人柄に触れ、院生の皆様の真摯な姿勢に感激し、圧倒され内省するメタ認知の途上です。

職場で、子どもたちの「人はどこからやってきたの？」「お空に果てはあるの？」などの哲学的で美しい質問に心を動かされながらレファレンスサービスに熱中する日々の中で、「なぜ？」という心はどこから生まれ、そして消えてしまうのかという問題意識を持つようにもなりました。「なぜ？」を大切に持ち続けられ、人は生涯^{おもしろい}面白い人生を送れると確信し、図書館がそれに寄り添う役割を果たせるのではとも考えています。学校の中で世界に開かれた窓として無限の可能性を秘めている異空間が図書館です。

実践から理論を生み出すような、または研究から実践を変革するような、双方の往還を意識して、教育学の側から見た学校図書館を論考したいと思っています。

「生涯教育学」との出会い

留学生から

生涯教育学講座
修士課程 1年

ジョン・ハンモ



私が初めて京都大学を訪れたのは、2009年夏の京都旅行の時でした。クスノキと時計台が演出する壮大な風景に魅了された私が、「一度この大学で勉強してみたい」と思ったことを覚えています。まさか、それが実現するとは夢にも思いませんでした。私は多くの方々の応援のおかげで、2015年春、無事に入学することができました。入学してから既に半年以上が経っていますが、合格した時の格別な感動は未だに忘れられません。

私は、韓国南西部に位置する群山市^{グンサン}という漁業と農業が共に盛んな田舎町で育ちました。親戚は大体漁業か農業、どちらかに携っており、海の幸山の幸を同時に楽しむことはできませんでしたが、しばしば仕事を手伝わなければならなかったのは大変辛かったです。しかし、そうした日常生活を通じて、世の中には学校ではできない「勉強」が存在するということが分かりました。つまり、経験がもたらす「学び」の重要性に気づいたのです。

このような私の気づきと通じるのが、生涯教育学で

す。生涯教育学では、日常生活から生まれた問題意識を自己主導的な学習によって解決し、最終的にその学習を自分の「変容」に繋げることがを重視します。絶え間なく新たな問題が発生し、それを自分で解決していかねばならない現代社会において、個々人の「学び」の重要性は益々高まっています。そのような状況で、近年各大学が、質の高い講義をインターネット上に公開している動きは、非常に有意義なものだと思います。しかし、主にMOOC^{ムーフ}(Massive Open Online Course)と呼ばれるこの講義が、どれ程の教育的な効果を生み出し、実際に如何に役立っているのかについては、まだ明瞭ではないところがあります。これからの研究においては、この点を明らかにしていくことに焦点を当てていきたいと思っています。そうすることで、より多くの人に自己主導的な学習の機会が与えられることを期待しています。

臨床教育実践研究センターから

センターの活動と実践の報告

附属臨床教育実践研究センター 特定助教 時岡 良太



今年で開設19年目となる臨床教育実践研究センターは、開設以来一貫して、市民に開かれた心理教育相談室での心理臨床実践を中心に活動してまいりました。また、そうした臨床実践に根差した知を社会に還元する活動として、毎年「公開講座」と「リカレント教育講座」を開催しております。

4月には、公開講座「複雑系科学からみたこころ」が開催され、多数のご参加を賜りました。講師は当センター客員教授で国際分析心理学会前会長のJoseph Cambray先生で、複雑系科学とユング心理学ならびに心理臨床実践とのつながりについて、心理学の枠組みを越えた幅広い見識と豊富な実践経験を基にお話しいただきました。

8月には、第19回リカレント教育講座が開催されました。本講座は昨年度、台風接近のためにやむなく中止となっておりましたが、その第18回を引き継ぎ、「いじめへの理解と対応」を全体テーマとしてシンポジウムと事例検討会が行われました。これまでいじめの問題に対して様々な形で関わって来られた経験をお持ちの3名の先生方をシンポジストに迎え、いじめという現象への理解とその対応について多角的な視点からお話し

いただきました。当日は100名近い方々にご参加いただき、活発な議論がなされました。

また、東日本大震災以降、当センターでは「こころの支援室」を開設し、震災に関連して関西圏に避難・移住されてきた子育て世帯への支援活動を継続して行っており、今年度は5月と11月に企画を実施し、また年度末にも実施する予定です。震災から時間が経つにつれ、それぞれが抱えておられる困難の形も個別化してきている状況にあることを踏まえつつ、今後も活動を継続して行っていく所存です。

こうした当センターの活動を支えていただいている方々に感謝するとともに、今後ともご協力とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



教育実践コラボレーション・センターから

授業という難問と向き合う—FDがフロッピーディスクだった頃

教育学講座 准教授 山名 淳



「この授業に費やした時間を返してほしい」。その言葉は、新米教員の胸に突き刺さり、貫通せぬまま身体の内にとどまって、痕を残して沁み込んだ。1995年のことだから、もうずいぶん前のことだ。私は初めて高等教育の場で教壇に立った。大学に就職するとは研究者になることだと思い込んでいた。大学教員として授業を行うことに、非常に愚かなことだが、思い及ばずにいた。四苦八苦しながら90分間の「舞台」に何とか立ち続け、最初の半期を終えようとしたそのとき、最後の授業で感想を書いてほしいと受講生に配った紙の一枚に刻まれていたのが、冒頭の言葉であった。

渡り廊下に付んで、向こうに見える校舎の授業風景を眺めた。授業が成立しているということ、まるで奇跡のようにうらやましく感じた。その後、先輩や同僚に声をかけては、「どんな授業をされていますか」と尋ねるようになった。「あの先生の授業は素晴らしい」という評判を聞きつけては、面識もないのにその教員に「たのもう」よろしく授業に参加させていただいた。誰に頼まれもしないのに授業アンケート調査と称した怪しげなシートを作成して、各授業の最終日に配布するようになった。FDといえはまずフロッピーディスクを意味していた時代において、ひとえに授業という謎への畏れから、なんだかせつせと「ひとりFD(ファカルティ・ディベロップメント)」を試みていたことになる。

世紀が変わって全国的にFDについて本格的に検討されるようになると、私の「ひとりFD」は跡形もなくその波に飲み込まれ、主体的であったはずのその営みは

いつしか外部から与えられるものとなっていった。それほど私の「ひとりFD」はもろかった。学習者本位であるはずの本物のFDとはほど遠いもので、教員の見栄の産物以上のものではなかったことが露呈した。今でも基本的に20年前と、私は何も変わっていない。授業はうまくいくこともあれば、そうでないこともある。手応えが感じられなかったときなどは、あのときの痕が疼いて「おまえはやっぱりまだまだなのだ」とささやきかけてくる。

授業はあいかわらず謎のままだ。けれども、当時とは大きく変わったことがある。授業という難問を前に悪戦苦闘しているのは、私だけではないということを知った。その「舞台」は、大学であったり、小学校であったり、中学校であったり、高校であったり。場所もさまざま、状況も多様。もはや孤独な戦いなどではない。そのことを実感できる場が、毎年「全国スクールリーダー育成研修」を提供しているE.FORUM(*)である。最初は講演者として登壇させていただいたが(2011年)、今では運営にも携わせていただいている。つまりはホスト役を仰せつづけているのだが、実は密かにE.FORUMは、私にとって授業の謎と格闘する同志と出会う大切な場所となっている。導くと同時に導かれる。教育実践コラボレーション・センターにおける「コラボ」の意味は、そうした力動性のなかで生み出される相互の自己変化のうちにもある、と感じている。

*E.FORUMのサイトはこちら。<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/e-forum/>

E.FORUMの取り組み

教育方法学講座 准教授 西岡 加名恵

E.FORUMは、2006年度の設立以来、教師のライフコース全体を見通した力量向上のネットワークを築くことをめざして活動してきました。多くの皆さまからご支援を賜り、おかげさまで本年度で10周年を迎えることができました。2015年には、次の3つの柱で活動しました。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

1)全国スクールリーダー育成研修の実施

本年度は講演「知力を測る」(子安増生教授)、「グローバル化する教育と留学概念の転換」(杉本均教授)、「児童期・青年期の発達と心の理解」(大山泰宏准教授)のほか、E.FORUM創立10周年記念企画として、劇作家・演出家の平田オリザ氏を講師に迎えたワークショップ「同僚・生徒とのコミュニケーションの取り方」などを提供しました。

2)教育研究セミナーの開催

変化の激しい現代社会において、ますます求められるようになっていく探究力の育成に焦点を合わせ、その評価のあり方などを検討するため、シンポジウム「探究力をどう育成するか」(3月28日)、「高等学校における探究の評価」(8月1日)を開催しました。8月1日には、京都大学COC事業(地(知)の拠点整備事業)「COOLO域」との共催で「高校生と大学生の探究成果ポスター発表会」も開催しました。

3)会員間の実践交流と共同研究開発の推進

E.FORUMでは会員の実践資料を蓄積するデータベース「E.FORUM Online(EFO)」を開設しています。そのデータなどを生かし、2014年度には、各教科の「本質的な問い」やパフォーマンス課題を提案した「E.FORUM

スタンダード(第1次案)」を公表しました。2015年度からは、「E.FORUMスタンダード」のさらなる改善をめざして、「全国スクールリーダー 育成研修」の場などで会員の方々と議論を深め、再検討を行っています。



「高校生と大学生の探究成果ポスター発表会」



シンポジウム「高等学校における探究の評価」



平田オリザ教授によるワークショップ

北京師範大学教育学部及び中国教育科学研究院との学術交流協定を更新しました

比較教育政策学講座 准教授 南部 広孝

教育学研究科・教育学部は中国の北京師範大学教育学部及び中国教育科学研究院と学術交流協定を締結しており、これまでさまざまな形で学術交流を展開してきました。今年度はその更新の節目にあたることから、子安増生研究科長、渡邊洋子准教授とともに訪中し、両機関と学術交流協定の更新を行いました。両機関との協定更新は2010年に続く2度目です。



北京師範大学

11月24日午後、まず北京師範大学教育学部との間で協定更新が行われました。石中英教育学部長と子安研究科長の双方か

ら、お互いが国際交流において重要なパートナーであり、今後も積極的な交流を継続したいとの希望が示されました。なお、同学部との間で実施している学術交流活動に参加していた大学院生6名も同席しました。



中国教育科学研究院

これに続いて中国教育科学研究院を訪問し、同研究院との間で協定更新が行われました。劉建豊副院長をはじめ6名が出席され、これまでの交流実績を確認しつつ今後の交流活動のあり方について活発な意見交換がなされました。

大学院・学部第3年次編入学 入試説明会

平成27年6月20日(土)及び11月14日(土)京都大学吉田キャンパスにおいて、平成27年7月4日(土)京都大学東京オフィスにおいて大学院及び学部第3年次編入学入試説明会が開催された。

吉田キャンパスでは、14時から佐藤卓己教務委員長の歓迎のあいさつ後、入試ガイダンスが行われ、大学院学生による個別相談が実施された。

東京オフィスでは、14時から佐藤卓己教務委員長の歓迎のあいさつ後、大山泰宏准教授によるオープニングレクチャー「人が学び育つということ」、入試ガイダンス、個別相談が実施された。

いずれの会場でも、受験希望者が熱意を持って参加していた。



オープンキャンパス2015

平成27年8月6日(木)～8日(土)の3日間、「京都大学オープンキャンパス2015」が開催された。

本学部においては、8月7日(金)12時30分から実施し、406名の参加者があった。

当日は、子安増生学部長の歓迎のあいさつ後、渡邊洋子准教授による模擬授業、各系の説明と質疑応答、併せて、楠見孝教授により次年度から始まる特色入試の説明が行われた。また、13時から16時まで、学生相談員が個別に相談にあたり、高校生の相談に親身に応じていた。

参加者は熱心に耳を傾けており、満足気な様子が見られた。



平成27年度教育学研究科長賞・教育学部長賞

学生表彰選考委員会委員長・副研究科長 鈴木 晶子

このたび、平成27年度研究科長賞・学部長賞の選考の結果、教育認知心理学講座博士後期課程2年の梶村昇吾さんが、研究科長賞受賞者に決定しました。おめでとうございます。

この賞は平成24年度に創設され、(1)学業、(2)課外活動、(3)社会活動などの分野で優れた成果を上げ本部局の名誉を高めた学生、その他、本表彰に相応しいと認めた学生に対して賞を授与するものです。本研究科・学部の教職員および学生ならだれでも推薦することができます。4回目を迎えた今年度も推薦をお願いしたところ、締め切りの9月30日までに、研究科長賞は(1)学業分野で1名、学部長賞は(2)課外活動分野で1名の推薦がありました。以下、選考経過と選考理由を簡単にご報告します。

まず、学生表彰選考委員会(委員は東山紘久・同窓会会長、稲垣恭子・副研究科長、佐藤卓己・教務委員長、岡野憲一郎・学生委員長、鈴木晶子)で、推薦を受けた候補者について慎重に協議・検討しました。その結果、梶村昇吾さんを受賞にふさわしい成果を有すると判断し、研究科長賞候補者として決定しました。また、学部長賞についても同様に慎重な協議・検討を行った結果、今回は残念ながら該当者なしという結論に至りました。以上の選考結果を子安増生・研究科長・学部長に報告し、承認され最終的に決定いたしました。



選考理由を説明する鈴木委員長

梶村昇吾さんは、神経心理学の一流国際誌Neuropsychologiaをはじめ、国内外の査読付き学術誌に既に合計6本採択され(うち3本は第一著者)、特に、前掲誌に掲載された研究内容は出版元であるElsevier編集部によりSTM Digestへの掲載論文に選出されるなど、国際的に高い評価を受けています。また、積極的に学会発表をし(国外5回、国内9回)、そのうち優秀な研究に対して与えられる演題賞およびトラベルアワードを3件(JSNP Excellent Presentation Award for CINPなど)受賞するなど、博士課程の学生として精力的に学業活動に取り組んでいることが高く評価されました。今回の受賞を機にさらなる精進につとめ、教育科学の発展に寄与されますようお願いいたします。



子安研究科長と受賞した梶村氏

研究科長賞



教育認知心理学講座
博士後期課程2年

梶村 昇吾

この度は、このような名誉ある賞を賜りまして、大変光栄に思います。受賞対象となった研究を実現することができたのは、本学研究科教育認知心理学講座の先生方や院生のみならず、ならびに充実した研究環境あつての賜物です。この場を借りて深く感謝申し上げます。

私はこれまで、「マインドワンダリング(MW)」と呼ばれる現象に注目して研究を進めてきました。MWとは、目の前の課題から無関係な自己生成思考に注意が逸れることであり、過剰なMWは授業の理解度の低下などにつながることから、その制御が重要になります。そのような背景を踏まえて私の研究では、人体を傷つけることなく一時的に脳活動を調整可能な手法「経頭蓋直流刺激法」と、本学こころの未来研究センターの「機能的核磁気共鳴画像法」を用いて、MWを脳刺激法によって抑制可能であること、およびMWの発生・制御に関わる神経機構を一部明らかにしました。本研究成果は、MWの神経基盤の理解およびそれを基礎とした制御方略の確立につながる意味で重要な成果と考えられます。

今後、この受賞を励みとして、より良い研究を生み出せるよう邁進いたします。この度は誠にありがとうございました。

京都大学学生考

教務掛 野村 昌平

教務掛に配属され、早いもので一年半が過ぎた。その間、京都大学の学生について感じたことや思ったことを、少し前に学生だった立場から、また、少し大人になった立場から書いてみたいと思う。

学生が窓口でその不注意から職員に怒られるというのは、普段からよく見かける光景である。その際、事務室で決まって飛び交うのは、「最近の子は…」や「京大生のくせに…」といった言葉だ。

「最近の子は…」は、私自身も学生時代に大人からよく言われ、反省しつつも、反感を持ったものだった。しかし、大人になった私は掌を返したように「最近の子は…」と言っている。これは両方の立場を経験したからこそやっと遠慮をせずに言えることだが、大人はそれほどきちんとはしていない。きっと若い頃もそう大差なく、同じ言葉を言われていたに違いない。この言葉は、いつの時代も「最近」



の人間が「最近」であった人間から言われ続ける常套句の一つに過ぎないのだ。だから、何も気にする必要はない。ただ、学生が大人になって、いつかこの言葉を使うときは、当時の自分を思い出し、少しは胸がチクッ

となつてほしい。

次に、「京大生のくせに…」は、本当に気の毒としか言いようがない。ただ京大生であるというだけで、色々と多くを求められる。同じミスをして、他大学の学生であれば注意で済むものが、それが京大生であるとまるで鬼の首を取ったかのような有様となる。ひどい場合は、その言葉の後に「勉強ができるだけ」と続いたりもする。学力が高いことは本来褒められてしかるべきことであるはずなのに、ここでは何故かマイナス要素になってしまっている。このようなことが言われる背景には、おそらく京大生への羨望や嫉妬があるように思う。言葉を変えれば、それは京大生への強い期待である。「京大生はエリートである」と言う、人でも違和感を覚える者や反発する者がいるかもしれないが、一般的に見て、京大生は、そのエリート意識の有無に関わらず、やはりエリートである。エリートは常に厳しい目で見られ、こうあってほしい、こうあるべきだという価値観を押し付けられる。「大いなる力には、大いなる責任が伴う」、「ノブレス・オブリージュ」といった言葉が、多少でもそのような京大生への励ましになればいいのだが。

とはいえ、賢明なる学生諸君であれば勘違いすることはないだろうが、「最近の子は…」、「京大生のくせに…」と言われることに対して同情しただけである。決して、掲示板・KULASISを確認しない、提出期限を守らないといったことを容認したわけではない。駄目なものは駄目なのである。

資料を長く残すために

図書掛長 飯田 智子

大学図書館の役割の一つに、資料を後世まで保存することがあります。とはいえ、資料は使えば傷むもの。皆さんも満身創痍の資料をご覧になったことがあるかもしれません。今回は、資料を長く利用していただくために教育学部図書室が行っていることをご紹介します。

・異物(書き込み、汚れ、付箋、輪ゴムなど)の除去、ページ折れを直す

いずれも見つけ次第処置をすることが肝心です。時間の経過とともに、それぞれ変質して取り除けなくなったり、紙面を傷めることがあります。酸化による劣化がひどい資料は、処置に耐えることができず、そのまま放置せざるを得ないときもあります。付箋を貼ること自体がNGな弱い資料もありますので、ご注意ください。

・和紙を使った簡易な修理

ページ破れや外れかけた表紙を補修する際には、和紙とのりを使っています。市販の補修テープは将来的に変質する恐れがあるので、本文にかかる部分には使いません。破れを発見した場合は、個人で修理を行わず、カウンターへお知らせください。

・修理製本

表紙が取れて構造自体が壊れてしまった資料や、ハードカバーを付けることで中身を保護したいペーパーバックなどは、思い切って製本をし直します。使い勝手は良くなりますが、表紙や背の情報が失われますので、対象資料はよく考えて選びます。

・保存袋、保存箱へ収納

修理をすることが難しい、または手を加えることを良しとしない貴重な資料は、そのまま中性紙の袋や箱に入れて保管します。触るだけでパラパラと崩れるものもありますので、慎重に取り扱います。また和装本は帙と呼ばれる特殊な保存ケースに入れることが多いのですが、予算の都合上、教育学部図書室ではほとんどがそのまま配架されています。



皆さんにも、資料を汚さない、乱暴に扱わない、返却ポストへは背から入れる、といった身近なところでのご協力をお願いいたします。

諸記録

H27年4月～H27年11月のおもな出来事

4月	24日(金)	高校生向け特別授業(対象:滋賀県立膳所高等学校) (京都大学)
	29日(水・祝)	附属臨床教育実践研究センター主催 公開講座「複雑系科学からみたこころ」 (京都テルサBC会議室)
5月	9日(土)	村山航先生講演会 「メタ認知研究からみたデザインを考える際の落とし穴: 学習・動機づけを促進するデザインを事例に」 (総合研究2号館第2講義室)
	31日(日)	こころの支援室主催 「花山天文台ツアー&星をつくろう」 (理学研究科花山天文台)
6月	17日(水)	SGH課題研究セミナー(対象:福岡県立京都高等学校) (福岡県立京都高等学校)
7月	6日(月)	Kichun Nam教授講演会 「Lexical and Eojeol ambiguity processing and representation in Korean」 (教育学部本館2階中央実験室)
	27日(月)	Alessandro Angrilli先生講演会 「New methods in psychophysiology of emotion and empathy」 (教育学部本館第1会議室)
8月	1日(土)	京都大学COC事業「COCOLO域」教育学研究科教育実践コラボレーション・センターE.FORUM共催 E.FORUM 高校生と大学生による探究成果ポスター発表会 (人間・環境学研究科大講義室) 教育実践コラボレーション・センター主催 E.FORUM教育研究セミナー「高等学校における探究の評価」 (人間・環境学研究科大講義室)
	2日(日)	附属臨床教育実践研究センター主催 リカレント教育講座「心の教育を考える」 (京都大学百周年時計台記念館)
	22日(土)～23日(日)	教育実践コラボレーション・センター主催 E.FORUM全国スクールリーダー育成研修「学校教育研究フェスタ」 (人間・環境学研究科大講義室)
	26日(水)	能と心理療法Ⅲー「フキ」とは何かー (教育学部本館第1会議室)
9月	6日(日)	特別講義「メディア文化論」(対象:復旦大学新聞学院) (吉田国際交流会館2F会議室)
	25日(金)	ハーバード大学Banaji教授:ステレオタイプの発達に関する講演会 (教育学部本館第1会議室)
10月	3日(土)	教育実践コラボレーション・センター主催 「減災の集いー地震に備える」 (旧野殿重仙房小学校(京都府相楽郡南山城村童仙房))
	18日(日)	教育実践コラボレーション・センター主催 公開ワークショップ 『InterProfessional(多職種連携・異業種交流)からプロフェッショナルリズムを考える - 木に関わる専門職の協業を手がかりに -』 (芝蘭会館別館研修室2)
	26日(月)	経済協力開発機構Koji Miyamoto氏:社会情動的スキルの発達と教育に関する講演会 (教育学部本館第1会議室)
	31日(土)	教育実践コラボレーション・センター主催 「野童いなか塾 2015自然観察会」～大人と子どもの地学教室～ (旧野殿重仙房小学校(京都府相楽郡南山城村童仙房))
11月	1日(日)	こころの支援室主催 「恐竜の卵を取りかえせ!&和・話・輪の会」 (吉田キャンパス本部構内 総合研究1号館)
	10日(火)	ワークショップ「京都大学的なメディア研究の展開とは」 (教育学部本館第1会議室)
	11日(水)	教育実践コラボレーションセンター・COC共催 高大連携ワークショップ「まちおこしワッショイー北高生と京大生でふるさとのこれからをthinking」 (対象:北桑田高校普通科2年生) (京都府立北桑田高等学校)

人事異動(H27.6.1-H27.11.30)

平成27年6月15日付け	派遣職員(教育認知心理学)	採用
平成27年6月30日付け	事務補佐員(総務掛)	退職
平成27年7月1日付け	高橋雄介	特定准教授(教育認知心理学 デザイン学) 昇任
平成27年10月1日付け	派遣職員(臨床教育学)	採用
平成27年9月9日～10月23日	WIGGER, Lothar	招へい外国人学者 受入
平成27年9月11日付け	事務補佐員(図書掛)	退職
平成27年10月1日付け	RAPPLEYE, Jeremy	特定准教授(臨床教育学) 採用
平成27年11月30日付け	事務補佐員(臨床教育学)	退職

外部資金受入

◎共同研究

研究題目	委託者	担当者
建築空間デザインがインタラクションに及ぼす影響の研究	株式会社 竹中工務店	教授 楠見 孝
高度な暗黙知の解明とその継承方法に関する共同研究	日本電信電話株式会社 サービスエボリューション研究所	教授 楠見 孝

◎寄付金

研究題目	寄附者	担当者
楠見教授の研究助成のため一なつかしさの研究	カルピス株式会社 発酵応用研究所	教授 楠見 孝
物語読解とその体験への介入による他者理解能力向上効果の実践的検討	公益財団法人 博報児童教育振興会	研究員 小山内 秀和
学術研究助成「福祉レジームの再構築とジェンダー：アジアの多様性とヨーロッパの変容のゆくえ」	公益財団法人 サントリー文化財団	教授 岩井 八郎
労働問題に関する調査研究助成金 「東アジアの若者層における教育過剰と就業行動・意識との関係に関する比較研究-EASS2015による計量社会学分析-」	公益財団法人労働問題リサーチセンター	教授 岩井 八郎
身体接触をともなう遊びが乳児期の脳および行動の発達に与える影響	公益財団法人 前川財団	教授 明和 政子

◎学術指導

指導題目	依頼者	担当者
体を揺らしたくなるイスに関する効果検証	コクヨファニチャー株式会社	准教授 野村 理朗

新任教員・事務職員紹介



Jeremy Rappleye

特定准教授

(2016年4月より教育学研究科准教授)

Japanese educational thought has many lessons to teach the wider World. How can we make these lessons understandable to the World? How can we cultivate students who are conversant in various modes of thinking and ways of being? I am highly honoured to join the Graduate School of Education as it attempts to answer these questions through the process of internationalization. Many thanks for this wonderful opportunity. Let us learn together.

所 属 臨床教育学講座

専 門 Theoretical, Philosophical Approaches to Educational Comparison

教育学研究科・教育学部基金を創設しました

ー未来の教育を創造するため、心・人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みますー

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場など人が育っていくあらゆる場面を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しました。本基金では、研究の成

果を現場(フィールド)に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

④基金の使途:

項目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣 など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催 など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動 など

詳細は以下のとおり

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>

編集後記



2015年も師の走る季節となりました。ニューズレター第31号は、教育学研究科・教育学部の研究・教育活動について、入試再考に示唆ある巻頭言、知性と個性がひかる研究ノートや活動報告、部局に関わる最新動向や国際交流、事務室・図書室報告や記録、諸報など、多様でゆたかな顔ぶれと取り組みを盛り込むものとなりました。このように教職員と学生が各々知的な努力と挑戦を重ね、持ち味と能力を活かし合って発揮するパワーと、互いの活躍や貢献を認め合い、刺激し合う中で生まれるハーモニーは、「実践コミュニティ」(レイヴ & ウェンガー)をも想起させます。激動の大学改革の中で、これらこそが新たな研究・教育の時代を切り拓く原動力となっていくのかもしれない。(w)

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

- 委員長 楠見 孝 教授
(教育認知心理学講座)
- 委員 子安 増生 教授
(教育学研究科長・教育学部長)
- 委員 渡邊 洋子 准教授
(生涯教育学講座)
- 委員 石井 英真 准教授
(教育方法学講座)
- 委員 田中 孝二 事務長
- 委員 古屋 比奈 総務掛長
- 委員 辻 幸代 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

TEL 075(753)3000

ホームページ

<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>